

## 新津丘陵の縄文遺跡 ～縄文土器の形と文様の変化～

田中耕作（新潟市文化財センター）

### はじめに

今回の「新津丘陵の縄文遺跡」という企画展を担当しました田中です。普段は弥生の丘展示館で、小学生への遺跡の説明や体験学習の補助という仕事をしております。

お手元にパワーポイントのスライドを焼いた資料と、展示解説のパフレットをお配りしてあると思います。展示解説パフレットに詳しく書いてあるので、その流れに沿って、話を進めていきたいと思っております。

さて、今回の展示ですが、副題が「文様と形のうつり変わり」となっています。たくさん土器がずらっと並んでいるような展示のイメージをお持ちだったかもしれませんが、新津丘陵の縄文遺跡はそれほど多くはないのです。また発掘調査も、道路建設とか圃場整備のように大きな開発で大々的に発掘して遺物がいっぱい出てくるという調査ではなくて、ほとんどが宅地造成のように小さな調査が多いものですから、遺物量も限られることとなります。今回、当市で持っている土器がそんなに多くないこともありまして、それをカバーするために、形になっている土器を新発田市さんと、五泉市さんからお借りしました。また展示説明は、新聞が対象を中学生くらいからとしているのと同じとし、展示ではいろいろな模型を作ってみました。

### 考古学をやさしくしよう

（スライド2）では画面に入っていきます。最初に「考古学をやさしくしよう」と出てきましたが、この佐原眞さんは、奈良の国立文化財研究所に長く勤められて、日本の考古学をけん引されてきた方です。平成4年、1992年に、新潟県埋蔵文化財センターの開館記念講演会というのがユニゾンプラザでありまして、そのときに講師として来られたんですね。超有名人だったものですから、みんなで喜んで聞きに行きました。最初からテーマが決まっているわけではなくて、会場でどんな話を聞きたいかとテーマを募りまして、その中から4つほど選んで解説してくれたんですね。何を話されたのかは忘れましたが、

最後にドイツ語で歌われたというのはみんなが覚えているという、そういった会でした。

その佐原さんが常々言っていること、書かれていることですが「考古学をやさしくしよう」「考古学を楽しくしよう」ということです。一番大事なのは、発掘の成果などを一般の方々にわかりやすく還元しなければいけないと。どうしても考古学の世界、専門用語を多く使いますし、また書き物ですと、わざと難しく書いてるんじゃないかと思うぐらいの文章もあります。それについては、自分でもそれじゃないかと思っはいますが、なかなか実践できないということがあります。

真ん中に書いてありますが、難しい言葉を日常語におきかえるとか、聞いてわかる言葉を使うとか、それからどうしても言い換えができれば解説を加えると言われてます。よく難しい言葉に単にルビ振って「はい、やさしくしました」というのは、やはりそれはおかしいんであって、内容を理解できなければ意味のないことですね。ただし、学術用語、どうしても使わざるを得ない言葉、言い換えができないという用語もあるので、それはしょうがないでしょう、というような言い方もされています。

今日ここに来られた方々は、考古学や縄文土器などに興味をお持ちの方が多いかと思っておりますが、内容的にちょっと難しい話が入ってくるかもしれません。展示できた土器が少ない分、「考古学では土器をこういうふうに見るんだよ」とか「このような考え方をしているんだよ」という、そういった基礎的なところをちょっとお話して、これから皆さんが他の展示を見るときに参考にさせていただければと思います。ちょっと難しいかもしれませんが、なるべく気持ちだけはわかりやすく話したいと思っております。

### 考古学の専門用語

（スライド3）では、本題に入っていきます。まず真っ先にこれが出てくるのですが、左側に赤字で書いてある「遺跡」、それから「遺構、遺物」と、これはもう言い換

えようもない単語ですね。遺跡の中には、その性格によって集落ですとか、製鉄の遺跡だとか、お墓の遺跡、洞窟とか、そのように分類できます。水中考古学というの、ダイバーが潜って調査していますね。

それから「遺構」という用語ですね。遺構というのは土木工事です。土を盛ったり削ったり、そのようにして土に刻まれた跡です。よく聞くのは「堅穴住居」ですね。半地下の家と考えてもらえばいいと思います。それから「土坑」、青字で書いてありますが、穴ですね。その穴もいろんな種類があって、貯蔵のための穴があったり、お墓であったり、落とし穴があったりと、そのような穴のことを土坑というのですが、そういったいろんな用語が出てきます。最近では盛土遺構というのがあります。ごみ捨て場みたいなところですが。

次に「遺物」。遺物とは昔の人たちが使った道具、土器とか石器。それから人骨、そして料理のゴミ。大体、遺跡から出てくるものはほとんどがゴミですよ。壊れた土器や石器作りのカス。ゴミを発掘しているということになります。材質で分けると土器・石器・骨角器・木器などに分けられますし、使い方では目的に応じて土器の鉢や壺の形だとか、斧類とか、あと土偶というようなマツリの道具とか、いろんなものがあります。

さらに、遺物を分析する上でどうしても使わざるを得ない、必ず出てくる言葉に「型式」という学術的な用語があります。馬高式とか、何々式という、「式」というのはこの型式の「式」ですね。これが考古学の一番の基本の用語になります。これをちょっと説明してみたいと思います。それから、「編年」という、字のごとく、年を編むということになります。どのように新旧で土器が並んでるかということですね。それから、土層です。層と言えればいいんですが、なぜか「層位」と言うんです。層の順序という意味なんでしょう。それから一番最後、「遺棄」という言葉。聞いたことがあるはず。実は報道でよく出てくる、死体遺棄とかいうときに使う遺棄です。残されたものという意味です。このような言葉もよく使います。

### 今日の話の流れ

(スライド4) 流れといいましても、もうレジュメが皆さんのところに渡っていますので、このような内容で進めます。1から6と書いてありますけれども、この1が一番長くなります。1が終わったとこ

ろでおおよそ半分の時間とを考えていただければと思います。こちら辺で多分切りがよくなると思うので、いったん5分の休憩を挟みます。そして、展示してある土器の流れに従って、前期・中期・後期・晩期という順序で、なおかつその時期に特徴的ないろいろなもの、文様の付け方とか、折衷の話とか、深鉢の使われ方ですね、そのようなものを該当する時期のところに挟み込む形で話したいと思います。

## 1 縄文時代とは

(スライド5) 縄文時代は、今から1万6500年から1万5500年前に始まります。これは放射性炭素C14を分析して年代を求めるという方法が、今は主流になってきています。ただ、分析はどうしてもプラスマイナスという誤差が出るのと、分析資料がまだ多くないということで幅がありますから、一番古く取りたい人は1万6500年前としますし、慎重な人は1万5500年前を使う。縄文時代の始まりは、このぐらいの幅に収まるということです。

パンフレットを1枚めくっていただくと、下に年表の帯があります。縄文時代は約1万3000年続くのです。この黄色いところが縄文時代で、この帯の84%ぐらいを占めます。一番右の端、明治・大正・昭和・平成・令和。これらを全部合わせた藤色のところがこのぐらいの幅ですから、いかに縄文時代が長いかがということが分かると思います。

縄文時代は、狩猟・採集・漁労の生活とよく言われますが、ドングリが主食です。この黄色い帯の中を草創期・早期・前期・中期・後期・晩期と区分しております。また、それぞれの中を細分するとき、考古の世界では前葉・中葉・後葉とか、初頭・末葉とか、そういった用語を使うのですが、普段なじみのない言葉ですね。そこで今回の展示パネルでは、初め頃・中頃・終わり頃、もしくは前半、後半と使いました。

一番長い草創期。土器が作られたときから縄文時代になるのですが、この頃はまだ最終氷河期に当たります。縄文時代の前は旧石器時代です。日本列島は4万年から3万8000年ぐらい前から人が住み始めたと言われていています。その草創期は、旧石器時代の終わり頃と同じような石器を使っています。細石刃と言う細かい石器を組み合わせた槍や、刃先だけを磨いた局部磨製石斧など。ただし土器を持っていて、狩りをしながらの移動生活。ですから、ちょっと私たちがイメージしている縄文時代とは違います。定

住の反対は遊動、遊動生活です。それは1カ所にいつも住むのではなくて、時期が来たらまたどこかに移動して動物を追うとか、そのような生活になります。そうすると多くの家財道具を抱えては移動できないです。だから、土器は1個か2個しか運べないし、縄文時代によく使う石皿という重い石なんか、当然持っていけない。

それが早期以降は、気候も温暖化して定住生活が始まり、縄文文化らしいいろんな要素が出てくることになります。大きな集落、関東・三陸とか太平洋側では貝塚が作られるとか、ドングリを保存する穴が出てくるとか。そして、1カ所に住んでいると墓地・墓域ができます。遊動生活ですと、人が亡くなればその場に葬るわけで、墓域はできないのです。

それから、弓矢の発明やいろんな石器も出てきます。前期以降は土器の種類が増え、漆を利用し、主食のドングリを加工する石皿、あとマツリの道具と書きましたけれども、土偶とか、装身具などの飾りですね、そのようなものも出てきます。それが縄文時代の特徴になります。そのため人によっては、この早期以降を縄文時代とし、草創期はまたちょっと別じゃないかなという人もいます。

### 土器は時代のモノサシ

(スライド6)「土器は時代のモノサシ」という、ちょっと変わったタイトルになっていますが、実は年表です。普通の、歴史時代の年表は何年に誰が何したとか、イイハコの語呂合わせで1185年に鎌倉時代が始まるというように、何年、何年というのが意味を持ちます。縄文時代では、土器がモノサシになるというのは、どういうことかと言いますと、土器を古いものから新しいものへとずーっと並べるのです、地域ごとに。そうすると、この土器よりもこっちが古いとか、これよりもこっちが新しいとか、そのような古い、新しいという前後関係が明らかになります。

もう一つ土器がモノサシになるのは、土器と一緒に出てきた石器や住居跡などの時期を知ることができるからなのです。変化の乏しい石器や住居そのものでは年代を知ることができないのですが、そこに一緒に出てきた時期のわかる土器があれば、その石器とか住居の時期を知ることができます。土器は大量に作られていると変化し、さらに生活に密着していることも、土器がモノサシになりやすいという理由になりますね。

次に、パンフレットの右下に書いてあるのですが、

AMS放射性炭素年代測定法という、炭を分析して年代を知る方法があります。炭素というのはC12、13、14とあり、その中のC14が放射性炭素といまして、ものすごく量は少ないものの、大変な仕事をしてくれます。5,730年かけて半分になるという性格を利用して、この炭は今から何年前か、今からというか、基準である1950年から何年前かということが分かるのです。

このパンフレットの年表をずっと見ていきますと、ちょっと字が小さくて分かりにくいですが、縄文時代中期の後ろのほうに、エジプト第1王朝、ピラミッドが作られた頃は、日本は縄文中期ですね。それから晩期のところ、中国で「子曰く・・・」という孔子が活躍していたのは、日本では縄文晩期になるのです。こういうことも、何年という年代が分かると、比較することができるようになりました。

### 土器型式と編年

(スライド7) 土器型式とは、形や文様などが共通する土器のまとまりのことを言います。同じような土器がある程度の広がり、それから時間幅を持っていると。あちこちで同じ土器が作られているということは、「このような形や文様で作らなければいけない」という、そのような地域ごとの約束事があり、ほかの地域とは区別ができるということです。そこで、この土器のひとつのまとまりを「土器型式」と言って、例えば馬高式とか三十稲場式と言うような呼び方をします。何々式というときは、最初に見つかったとか、まとまったいい資料があるとか、そのような遺跡の名前にこの「式」が付けられます。馬高式は、馬高遺跡の出土土器に対して付けられた型式名になりますね。

それから、土器編年というのは、モノサシのところでは言いましたように、その地域の土器を順序よく並べ、それを隣接する地域の土器群と比較して、横の関係もつかみます。相対年代という言い方をしますが、比べる年代となります。時間がタテ、広がり、ヨコの関係となります。

そこに、先ほどの何年前という放射性炭素年代を加えますと、この土器は何年前、こっちの土器は何年前と、土器に年代が付くことで、遠隔地であっても同じ時期の土器を比べることができます。

### 土器の形と部分の呼び方

土器の形と部分の呼び方について、お話しします。(スライド8)の下に縄文土器の基本的な形を示しました。これは、甲野勇の『縄文土器の話』という一



般向けの概説書に載っているものです。正方形を9分割し、その比率で深鉢・鉢・皿・甕・壺を基本の形としています。ただ実際は、鉢というよりも浅鉢をよく使います。その浅鉢も人によって、時期によって、鉢に近かったり、また皿に近かったり、厳密にここから浅鉢だよとか、ここから鉢だよという、そこまでの区別はないです。それから、深鉢はほとんどが鍋として使われる。煮炊きの道具ですね。先ほど言いました草創期の一番最初の縄文土器というのも、用途は鍋から始まりました。ヨーロッパの地中海では貯蔵用の土器から作られるので、違うんですね。日本の場合は鍋。そこで深鉢を、深鍋という言い方をする人もいます。

次に、土器の説明などで、口縁部とか、体部・底部とか、そのような言い方を聞くと思いますが、これは陶磁器の呼び方から来ています。図の右上のほうですね。田口昭二さんによる『美濃焼』の部分名称です。碗では体部が口縁部・胴部・腰部に分かれています。壺には口頸部や肩部があるというように、器種によってやや異なります。それを考古学のほうで借用しまして、深鉢の場合は、口縁・口縁部・体部、人によっては胴部と言いますが私は体部を使います。それから底部・底面と。厳密に境目はなく、大体こういう部分だと。口縁部は器種に限らず文様が多く付けられるので、よく使います。

口縁の形では、直立、直立は大丈夫ですね。内傾というのは、内側に直線的に傾くんです。外傾は外に傾く。内湾というのが内側にこう湾曲しているんですね。その反対が外に反るという外反。こういった口縁の断面の形が言い方としてあります。

ついでに、私は学生のときに、先輩から口縁の先端のところを「口唇」って教わったんですね。でも山内清男という著名な縄文土器研究者は、口唇の使い方として、「口唇の作出のあることもあり、ないこともある。単なる口端は……」という言い方しています〔山内1930〕。つまり、口縁部の端の外面は、本来は口端という名前で、そこに「いかりや長介」の唇みたいなものですが、粘土を付けられて膨らませると、その状態を口唇と呼ぶ。ちょうど右の図の壺のところ、これ本当は陶磁器では玉縁口縁と言うんですが、このように、ちょっと膨らんでいる状態を土器の場合は口唇と表現するようです。

以上が、土器の部分の名称です。最も使われるのは、口縁・口縁部・体部（胴部）・底部でしょう。これだけでも覚えておけば、土器の見方が変わってく

るかと思います。

### 土器を分解して見る

土器をどのように見たら良いかですね。同じ型式、違う型式。どこに注目して比較するかということですよ。（スライド9）の右上の土器は、今、展示していますが、後期初め頃の三十稲場式の標準的な土器です。表の真ん中タテの列が「特徴」とした比較項目です。部位と言いますが、場所ごとに分けて考えます。全体の形を見たときに、口縁部がくびれた形ですね。これは蓋が載る形ですが、ここに無紋という文様のない部分があって、橋状把手が4つ付きます。そのすぐ下には粘土紐を貼り付け、そこに刻みを入れています。頸部の刻み隆帯です。そして、体部全面に特徴的な刺突文が施されるという、これが標準的な形になります。

これを念頭に置いて見比べます。左下は菅生田遺跡という宮城県南部の遺跡ですが、この場合、体部の全面刺突文以外は全部三十稲場式と同じですね。そして、逆に愛知県の権現山遺跡、この場合は体部の全面刺突という、特徴的な刺突文はそっくりなので、この刺突のやり方が伝わっていったかもしれません。けれども、それ以外の要素の特徴はみんな異なり、これは三十稲場とは言えないと判断するんです。ですから、標準に対してどのぐらいまで一緒なのか。3分の2一緒だったら、もうその型式の仲間だよと。半分だったら、いわゆる折衷、折衷という両方の特徴を併せ持った土器だよという言い方をするようになります。ただこの権現山遺跡だって、三十稲場式に特徴的な花弁状刺突文の体部破片だけ出れば「三十稲場ですよ」と言えるわけです。ただ全体見ると違うよと、そういった同定の仕方になります。

### 土器の新旧と同時

（スライド10）土器編年、土器を順序よく並べていくときに、新しい、古いをどうやって見分けていくかという原則があります。これが一番大事なんです。（1）層位学的方法、（2）型式学的方法、（3）一括遺物です。

まず（1）の層位学的方法には二つの法則があり、ひとつは地層累重の法則といいまして、水平堆積した土層は、下のほうが古く、上の層が新しいということ。これは誰でも「はい、そうですね」と思いますよね。もうひとつは地層同定の法則。遠く離れていても同じ層がある。これは火山灰が当てはまります。始良・丹沢テフラという火山灰があって、鹿児島湾の一番奥がちょっと丸くなっていますが、あれ



がひとつの大きい火口です。その大きな火山が噴火するのは、2万9000年前から2万6000年前頃です。火山灰は、秋田、それから岩手の南辺りまで飛んでいます。それでこの火山灰層の上層か下層かで年代区分ができます。

また、北朝鮮の白頭山。聞いたことがありますよね。白頭山は平安時代中期の西暦946年に大きな噴火をしていて、『興福寺年代記』という奈良のお寺の記録に「10月7日夜、雪のごとき白い灰が散る」とあるんです。秋田県の平安時代の堅穴住居を掘ると、埋土に数cmの白い層が入っています。それが白頭山の火山灰だそうです。このように、遠く離れていてもその火山灰が鍵となって年代の前後をつかめるということです。近い所ですと、西会津に沼沢火山があり、縄文前期の終わりぐらいの大木6式土器の時期に火山灰が降り積もり、その上と下とで土器群を分離することができます。

(2)の型式学的方法。これが一番難しいのですが、土器がどのように変化していくかを確かめる考え方は、本来あったものがだんだんと崩れてくる。役割を失っていく。よく使われるのが、背広ですね。この左襟に穴がありバッジを付けたりしますが、もともとはボタンの穴だったのです。本来の機能が退化し、役割が変わっていくという例。自動車や服装も、詳しい人なら新旧で並べられますよね。こういう変わり方を調べて、こっちが古い、新しいというのを確認していくのが型式学です。このようにだんだん失っていく、崩れていくと言われていたのですが、逆に発展していく、だんだん豪勢になっていく、というのもやっぱり変化です。その新旧の流れの方向性をつかむには、層位学や一括遺物の方法を使います。

それから折衷土器。これは別型式の土器の構成要素や文様が、ひとつの土器に取り込まれている状態です。ということは、違う地域の別型式の土器が同じ時期、同時とわかる一番確実な土器になります。

それから(3)の一括遺物の考え方です。これは穴の中などで、一緒に出てくる土器とか、そのようなものを基にして「一緒に出土した。だから一緒だ」と考えていくのですが、そう単純ではなくて、土から出てくるのは私たちが発掘した時、つまり埋められた段階を示しているだけなので、土器が作られた時期じゃないのです。ここが一番大事で、知りたいのは一緒の時期に作られた土器なのか、時期的に前後している土器なのか、という点です。これについて

では後でちょっと詳しく説明したいと思います。

### (1) 層位学的方法

(スライド11)まず層位学的方法の実践から話します。層位とは、土が堆積した層の単位を示す用語だそうです。左の図は、阿賀町室谷洞窟の土層断面図です。昔の上川村の山奥、有名な草創期の遺跡として、長岡市立科学博物館の中村孝三郎さんがこんな山奥で発見した遺跡です。発掘には、皆さんご存じの小林達雄さんら大学生と一緒に参加して、そのときの最新の調査方法でこのように層を分け、遺物も層ごとに取り上げた画期的な発掘調査です。室谷下層は草創期、室谷上層は早期以降に当たります。

それから右の写真は、東北大学が発掘した宮城県の中沢目貝塚という遺跡の土層堆積になり、これは報告書を複写したものです。貝層と土層、それらの混ざり具合で混土貝層とか混貝土層といった言い方をしますが、そのような層が順序よくミルフィーユみたいに堆積しています。これを1×2mとか、2×2mというような狭い範囲で掘り、横にスポスポって切って掘っていくと、出てきた下の土器は古い、上が新しいというように分けていけるのです。それが分層発掘調査になります。

ただ、山内清男さんという縄文土器研究の第一人者は、縄文土器編年の枠組みを確立した人ですが、「土層は生では使わない」と言っていたそうです〔田中1992〕。それは見えない土層の乱れとか、上から掘った穴とかがあるからと。この土器はそれよりも下層から出た、それを直接は使わないで、量の変わっていく傾向をつかむのだそうです。下にあったのが上層に行くとだんだんなくなるとか、この層から別な土器が加わるようになったとか。そうして土器の古い、新しいを調べていくということです。

### (2) 土器型式の時間と空間

型式学的方法のうち、土器の型式変化と広がりについてスライド12・13で説明します。

(スライド12)は大雑把な概念図です。ここでは土器型式Aを一番古いとします。ここから時間がたつと土器型式Bに、そしてCに変わっていくのですが、どうして変わるかと言ったら、外から何らかの刺激や情報が入ってきて「そっちがいいな。じゃあちょっと加えてみようかな」というように徐々に、あるいは急激に変わっていく。その変化の目立つところで区切ると、別型式の成立となります。隣の土器分布圏に含まれてしまうことも、また逆もあります。

(スライド13)は、長岡市を中心とした中期中頃の

火炎土器の変化と、同じ時期の周辺地域の土器型式の広がりです。火炎土器には火焰型と王冠型があります。左の図は時間の流れを示していて、東北系の大木8式を母体として、北陸の新崎式や北関東・長野の焼町系土器の要素が加わって火炎土器が成立し、それが順次変容して、栃倉式に変わっていくと。ひとつの地域の中での型式変遷を示しています。

右の図は、火炎土器の時期に、周辺地域ではどのような土器型式が並存していたかを示しています。東北では大木8 a・8 b式があって、もっと北の秋田・青森では円筒上層式。関東では勝坂式・阿玉台式・加曾利E式とか、群馬の新巻式・焼町式、そして長野・山梨では勝坂式・曾利式。上山田・天神山式は北陸の土器です。このように、別々な土器型式を持っている集団が同じ時間幅の中で共存し、またそれぞれの間で交易とか人の行き来があり、情報の伝わるのが土器の動きを通して見えます。

### (3) 一括遺物の考え方

土器が同時期か、新旧関係があるかを知るには、遺物の共伴出土と一括遺物という考え方を理解することが必要です。土器捨て場でピツタリくっついて出土した土器は共伴出土ですが一括遺物ではありません。墓の副葬品や貯蔵穴に並べられた完形土器は、目的をもって埋置しているので一括遺物です。また、共伴出土は同時に埋まったものであり、遺物の作られた時期が同じとは限りません。

(スライド14)に概念図を書いてみました。長方形の枠を遺構としますと、上に発掘と書かれた真ん中の枠内、この丸とか三角・四角、これを土器と考えてください。この3種類の土器が一緒に出てきましたよ、ということです。その3種類の土器は、作られた時期がいつかは分かりません。でも、埋められたときは一緒だったのです。一緒に埋められて、そのまま長い時間がたって、発掘で一緒に出てきたことになりますから、出土の同時というのは間違いありません。でも、いつ作られたか、一緒に作られたのか、別なのかは分かりません。それを知るためには、土坑とか他の遺構では、土器がどういう組み合わせで出てくるか。そのような例が集まってくると、例えばこの三角と四角がいつも一緒に出てきますよ、となると、この三角と四角は同時に作られたと考えられます。製作の同時、同時に作られたものだと言えます。佐原真さんは、5つ以上の例があれば確実に同時期だと言うのですが〔佐原1974〕、ただ、そのような発掘例は少ないです。

一括遺物は、同時に埋められたもの、目的を持って一度に埋置されたものを指します。

右上の写真は、私が掘った弥生時代のお墓です。亡くなった方をいったん埋めるなりして、何年か後に骨だけを取り出して、こういう壺に入れてまた埋め直す、再葬墓というお墓になります。これは間違いなく当時の人が一緒に埋めたのですが、これすら本当に全部と一緒に作られた土器かはわからないですね。ずーっと割れずに取っておいた昔の古い土器と一緒に埋めているかもしれないですから。下の写真は縄文晩期の終わりころの穴になります。浅鉢が3個と、鉢が2個と、注口土器が1個、完形土器だけが埋まっていました。穴倉のつもりだったのか、目的を持って当時の人がこう置いたというもので、一括遺物と言えます。

そして(スライド15)。土坑の危ない共伴出土例です。私がまだ若かりし頃に掘った遺跡で、縄文晩期後半の大きな土坑になります。大きな土器片が重なり合って出土したのです。写真と図面をとってあります。右に縄文晩期後半の編年表、つまり古い土器から新しいものを上から下へと並べた図があります。浅鉢とか深鉢とか並んでいます。この赤印で囲った土器、この土器1個だけが上野原式という古い土器で、そのほかの土器は全て鳥屋1b式という2段階新しい時期になるのです。つまり、作られた時期の異なる土器と一緒に埋められた状態ということです。古いものが新しいものに混じって出土する可能性は、いくらでもあります。編年が定まっていなかったら、同時期と扱われるでしょう。

話は飛びますが、中世の室町時代の終わり頃の福井に、織田信長に滅ぼされた朝倉氏の城下町の一乗谷があります。そこで発掘された医者の家から、中国の龍泉窯の非常に立派な壺が2個出ているんですね。鎌倉時代の高級な青磁の壺です。これが室町時代の医者の家から出土した。どう解釈するかといったら、その医者は骨董趣味で、鎌倉時代の壺を集めていたんだと。ですから、作られた時代と埋まった時代はイコールじゃないということがよくわかると思います。

それから(スライド16)、これは今回展示してある新潟市平遺跡の1号住居と土器になります。この後期初めの堅穴住居は発掘例が少なく、いい例です。周りにぐるっと柱の穴があり、真ん中に地床炉というんですが、土が焼けたイロリがあります。石組みを持たない炉です。土層断面図を見ると、土が左側

から流れ込んでいるというか、埋められているような状況が見られます。土中から出てきた土器は破片ばかりで、これはどう見ても埋めた土に入っていた土器だろうと解釈します。こういう出土状態では、住居内の出土共伴とは言えないですね。一緒に出てきたんだよというのはちょっと使えないです。やはり形のある土器で比較していかないと。資料を扱うときには、こういうものは注意しなきゃいけないってことになります。

(スライド17)は、福島県三春町の西方前遺跡で、竪穴住居の中に複式炉という大きな炉が壁近くにあり、炉の端に土器を埋めた火種入れみたいな場所があって、広い方は石を敷いてあります。中期の終わり頃でちょうど一番寒い時期に当たります。入り口がこの炉の近くなので、風が入り込む寒いほうに炉を作って、少しでも家の中を暖かくしようという知恵です。この炉には、上と下を打ち割られ輪切り状になった2個の土器が、入れ子にして埋められています。右の写真の上の土器は、福島や山形に多い大木10式土器で、下は関東の加曾利E 4式で、ほぼ同じぐらいの時期。離れた地域の土器と一緒に出ています。

#### 遺構と遺物の新旧関係

(スライド18)です。左は土坑の新旧を示す一番単純な模式図です。上が平面図で、発掘すると、こう線引きします。右が新しく、左の穴を切っています。「切ってる」という言い方は変ですが、考古学の特別な用語ですね。新しい方が「切ってる」、古い方が「切られている」と、切り合い関係と言います。それから遺構や遺物の出土状態では、「生きてる・死んでる」も使います。後世の攪乱を受けている場合は「死んでいる」です。さて、土坑の断面を見れば、右が左を壊しているの、左が古くて、右が新しい。そうすると、この土坑の中に土器が含まれていると、左の土坑の土器が古くて、右の土坑の土器が新しいと言えます。

右の略図を見てください。土層の逆転と書きましただけでも。緑の草が今の地表です。掘り下げていくと土坑が出てきます。例えば、赤い●土器の時代が縄文時代であり、上に平安時代の層があったとします。この穴、平安時代の途中で掘られたかもしれないのですが、この上のほうの平安時代の青い▲土器の入ってる土が先に崩れて、下へ落ち込みます。後から、本来古いはずの赤い土器が後から落ちてきます。そうすると、土坑の中では深さが逆転するん

ですね。これは、新潟大学におられた小野昭先生から聞いた話で、沖縄の洞窟を発掘したときに、この現象だったのだそうです。古いはずの遺物が上で、新しいはずのが下から出てくる。ですから、遺構での遺物出土状態の解釈には、注意が必要なのです。

右下のメモです。埋置、埋め置くとか、埋め納める。目的や意識を持って行った状態ですね。それに対して廃棄や土器片などが偶然土に混じっていたもの。土器にとっては無意識で行われた行為の偶然の結果。さらに遺棄というのもあります。報道で耳にする死体遺棄もそうですが、置き忘れたとか災害の結果。榛名山の噴火で、古墳時代のよろい着た武人が倒れ込んだまま埋まっていたとか。それから有名などころでは、千葉県の姥山貝塚の竪穴住居から、成人の男1人と女性が2人、子ども2人かな。そういう人たちが住居の中に埋まっていたと。それらは多分災害、疫病か何かで、その状態のまま手を加えずに埋めてしまったんじゃないか、そのまんまの状態ですね。遺棄ですが、そのように遺構と出土物は解釈されます。

## 2 新津丘陵の縄文遺跡

(スライド19)やっと展示にたどり着きました。パンフレットの1ページをご覧ください。新津丘陵は新潟平野を北に向かって飛び出すような形をしていて、東に阿賀野川、西に信濃川が流れています。95～110mくらいの里山と言われるような低い山々ですが、南のほうへ行くともう少し高くなります。丘陵の端々に作られた遺跡の標高は15～22mです。

丘陵上には、前期から晩期の遺跡があります。その中で規模の大きな遺跡は丘陵北端の秋葉遺跡と東側にある平遺跡で、丘陵の縁辺の緩やかな平坦面、平野を臨むような場所に遺跡が作られています。平遺跡は中期初めと後期前半の遺跡で、多くの土器を展示しています。ちょうど、平遺跡での時期が空白の中期中頃から終わり頃までが秋葉遺跡になります。平遺跡と秋葉遺跡は直線で約3km離れています。晩期後半の大沢谷内遺跡は、新津丘陵から西へ約1km離れた田んぼの真ん中にあります。地図でいえば左下です。それから大沢谷内北遺跡も同じ時期です。

各遺跡の詳しい内容については、パンフレットの最後のページをご覧ください。ご覧になっていただければと思います。写真を若干用意してありますので、それに沿って説明します。



(スライド20) 秋葉遺跡は、秋葉神社や秋葉公園の近く、新津丘陵の一番北の端になります。下の写真にありますように、家が建つ範囲を四角く発掘調査したり、上の写真は斜面に駐車場を造成するための調査で見つかった縄文後期の石囲い炉です。山の中腹のこの遺跡と平地との高低差ですね、これを比高差という言い方をしますが、おおよそ15メートルぐらいです。この遺跡では、平成10年から13回の発掘調査を行っています。

(スライド21) これは南側から見た平遺跡で、今度は丘陵の東側の端になります。この杉林で囲まれたところが現在の集落で、丘陵上になります。丘陵の右端に平遺跡があります。発掘調査は昭和56年と令和2年の2回行われています。令和2年の発掘調査では、下の写真にありますような穴の中から、高さ16.5 cmの非常に小さい土器が出ています。この穴は半分なんですけど、出方からすると、もしかしたらお墓の副葬品かもしれないですね。中期の初めごろの土器になります。この遺跡からは、石錘・土錘と言われる重りが非常に多く出るので、阿賀野川とか、横の能代川で魚を捕ったりする網に使われたのだと思います。こういうものがいっぱい出てきています。

(スライド22) これは大沢谷内遺跡、田んぼの中です。国道403号のバイパス工事で発掘した遺跡になります。パンフレットにありますように非常に変わった遺跡でして、不純物が多い天然のアスファルトを精製している遺跡のようです。遺跡から出ている遺物に、日常使う道具が少なかったり、マツリの道具がほとんどないとか、普通の遺跡とは違う性格なようです。それから物々交換に使う交易品ですね、そのようなのがいくつか出ていることから、報告書では交易の中継地点のような特別な遺跡と考えているみたいです。

考古学は、学問は何でもそうですが、書かれたことをそのまま信じない、なるべく疑ってかかるということが大事でして、私が疑問に思ったのは、何で山裾で採れたアスファルトを、わざわざ1 kmも離れた所まで運んできて精製するのかと。山のその場で精製すればいいんじゃないかなということです。そのような疑問を持つことは大切だと思います。

### 新潟平野に入る道

(スライド23) 次行きます。これは各地から新潟平野に至る道です。基本的に大きい川沿いに人は行き来するようです。新潟平野に入ってくる人の動きは、ひとつは当然ここでは海ですね。北陸からは海沿い

に入ってきますし、北からも当然入ってきます。それから、山形の置賜盆地ですね。そこは、もっと東に行けば仙台になりますから、仙台から山を越えて、荒川を通して入ってくるルート。それから福島から会津を通して阿賀野川で入ってくるルート。面白いのは会津から只見川沿いに魚沼に入ってくるルートがあります。今の只見線ですね、鉄道でいうと。そして関東からは、福島の郡山・会津のルートと、群馬の北から軽井沢、そして千曲川を通して信濃川から津南・十日町に入ってくる、こういうルート、その途中から上越に入ってくるルートと、こういうのがあります。

たとえば、飯豊山の登山道で石鏃を拾った話もありますが、基本的にはそんな無理して奥山に行かなくても、川沿いを人は動くと考えていいと思います。阿賀野川下流域の土器は、会津とそっくりな土器がいっぱい出ているんですね。ですから深い交流があったことがわかりますし、逆に津南のほうの魚沼は、長野と非常に強いつながりがあって、関東に近い土器も長野を通して魚沼にいっぱい入ってくる。新潟県は広いので、また高い山で囲まれているので、地域地域での人の動き、どういったルートで情報が入ってくるか、ものが動くかは、決まっているようです。

人が動くと、婚姻も考えられますし、変わったもの、珍しいもの、皆さんよくご存じのヒスイや黒曜石、そしてここで採れるアスファルトも運ばれる。アスファルトなんかは太平洋側の、特に仙台湾の北側や三陸海岸ですね。そこで骨角器、鹿の角とか骨で作ったモリとかヤスとか、そういった漁労具の接着剤としてよく使われています。アスファルトは水をはじきますからね。接着剤にはニカワや松脂だとかいろんなものがあるでしょうけども残らない。漆もありますが、アスファルトがよく使われるようですね。そういった特別な、どこにでもあるものじゃないものは、やはり交易品。お土産とか、物々交換とかで運ばれているようですね。南関東ですと貝塚が有名です。とてもひとつの集落で食べきれるような量じゃない、べらぼうな量の貝が捨てられているのです。よく言われているのは、干し貝として山のほうへ運び、物々交換するのではないかと。そのような道としては、やはり川沿いが大きな交通路、交易路になるのではないかとということですね。土器も同じように、こういうルートで伝わり、広がっていくことになります。

## 土器の分布圏

(スライド24) 土器の分布圏は、中心となる場所とその周辺部です。周辺部というのは、違う土器型式を半々ぐらいに持っているような遺跡です。それから遠隔地とって、スライド9で型式の比較をするときに、愛知県と宮城県の土器を示しましたが、ああいう飛び地的にぼんぼん出てくる遺跡です。ですから、ほんとの分布じゃない。やはり中心的な分布域と、それから周辺でいっぱい出てくる周辺域をまとめて、土器分布圏という言い方をします。

## 3 縄文前期の土器

ここから、今展示している縄文土器の概要を時期ごとに説明していきます。まずは前期の遺跡ですが、新津丘陵は少ないです。パンフレット3ページ目の下の帯のところ、前期のいつぐらいか大体わかると思うのですが、新津丘陵周辺で一番古い遺跡は、居村遺跡E地点で、前期初めぐらいですね。布目式と言って、角田山麓近くに標識となる布目遺跡があります。(スライド25)の左上、縄の端だけを横に何段も転がしていくループ文という文様です。

それから、真ん中は新発田市からの借用で、鉄分の多い赤っぽい土器に、白く細い粘土紐を貼って、その上を細い竹を割ったような道具で、てんてんと押して下がるようにして付ける文様でして、結節浮線文といいます。こういう非常に変わった土器があります。これは北関東から新潟にかけての、前期の終わり頃に流行っていた土器だそうです。

それから下段の2つの写真は、草水町二丁目窯跡という、平安時代の窯跡の遺跡ですが、その一角から出土した縄文前期の土器になります。左の土器は、ガラスの金魚鉢のような形ですが、文様は細い粘土紐を貼った結節浮線文で真脇式。右下は、細い粘土紐を貼っただけの朝日下層式ですが、これらはいずれも北陸に分布の中心のある土器群です。また左下の、幅広い粘土の帯を貼り付けた文様は、東北の大木6式になります。右上の地図を見ると、赤い線の北陸の土器の分布圏は、日本海の海岸線を新潟県から山形県まで広がっています。東北の大木6式は青い線。新津丘陵は両方の分布圏が重なっている場所で、両方の土器を持っていますが、草水町二丁目窯跡では北陸系の土器が圧倒的に多いです。

## 縄文土器の作り方

(スライド26)ここで縄文土器の作り方の話しをします。スライド26~28です。昨年東京の江戸博物館

で縄文時代の展覧会がありました。ちょうどコロナ禍だったので残念ながら行けなかったのですが、その中で多摩ニュータウン遺跡。ここに書いてある多摩NTというのは、多摩ニュータウンという意味です。多摩ニュータウンNo.245遺跡の51号住居から、家の中で土器を作っている状態が見つかっているんですね。右の写真は、焼く前の土器がそのままつぶれて出てきているんですね。生の粘土です。焼く前の土器ですね。

それから、左写真の真ん中の白っぽく見える丸い板は、器台です。円盤に円筒形の台が付いた土器で、以前から土器作りの台だろうと言われていた焼き物です。実際に、このように生粘土と一緒に出てきたのは初めてですから、住居の中で土器を作っていたことが、ここで確認されたということです。ただ、じゃあ屋外で作ってないのかというと、そのような証拠はないので、外で作っていることもあるかもしれないよという解釈です。

縄文土器の作り方は、パンフレット3ページ上に要約しましたが、初めに①素地(きじ)づくりです。素地(そじ)と書いて素地(きじ)と読みます。取ってきた粘土は、そのまま焼くと縮みが大きく割れやすいので、そこに混和材という混ぜ物を加える。よく使うのは砂ですね。大量に砂を入れる。もしくは枯れ草や動物の毛を混ぜ入れる。古い土器片をつぶして入れた場合は橙色の粘土粒に焼きあがる。そうやって素地という土器を作る元を準備するのです。砂は石が砕けたものだから焼いても縮まないで、土器も割れにくくなるのです。もうひとつ大切なのは、砂は川によって顔つき、つまり岩石の種類が違いますから、混和材を分析することによって、これは、ここら辺の土器だとか、この混和材は全然見たことがないとか。他地域から搬入されてきた土器を区別ができるようになります。これを胎土分析といいます。

次、②形を作ります。このパンフレットにあるように、葉っぱとかの敷物の上に円盤状の粘土を置いて、そこに粘土紐を一段ずつ積んでいって形を作るんです。そのときに、例えば石の上にとんと粘土を置いたら、もう動かせないわけですね、粘土は。ですから、葉っぱとか編み物などを敷いて、その上に粘土を置くのです。この敷物については、(スライド36)、パンフレット7ページ上に載せてあります。

③内外面の形を整えて、生乾きになってきたら文様を付けます。火焰土器の把手のように大きな装飾

は、太い粘土紐を組み合わせて立体的に作るのです。縄目などの文様の付け方は、後で説明します。

④仕上げです。内面は乾き切らないうちに、つるつるの石とか貝殻で磨くのです。そうすると目が詰まって水が漏れにくくなります。これをやるかやらないかで全然違います。ですから遺跡の発掘では、こういう小さいつるつるの石が出てきたら、それを疑って必ず取っておくんです。それを実体顕微鏡で見たら、細かな擦痕がいっぱい入っていました。

⑤そして、最後の焼成です。日陰でよく乾かしてから焼きます。言われているのが500から700度ぐらいの低温ですね。この温度分析の方法にもいろいろあるみたいで、例えば黒鉛を胎土に入れる地域があり、700度を超えると黒鉛は変化するものの変わらないままだから、その土器の焼成温度は700度には達していないとか。

#### 粘土採掘坑と保存粘土

(スライド27)を見ましょう。これは粘土採掘坑です。粘土を採った跡。これは最近数か所で見ついています。先ほど土器作りで触れました縄文中期の多摩ニュータウンNo.245遺跡のすぐ隣で、No.248遺跡という粘土を採掘している遺跡が見ついています。ここからは約600トンもの粘土が採られ、隣りのNo.245遺跡のムラだけではなく、あちこちのムラまでも、粘土を供給していたのではないかと考えられています。

そして下段の一番左。これは長岡市の三十稲場遺跡の粘土採掘坑で、6m×4m×深さ3m、下に粘土の層がある穴です。後期の初めくらいで、ちょうど今展示している平遺跡ぐらいの時期になります。最近ですと、写真右上の会津坂下町の竈原遺跡から、非常に質のいい白い粘土の層が見ついています。縄文後期中頃と晩期初め頃の、二つの時期に採掘された粘土採掘坑です。全面掘られているのが後期で、この断面が見えている丸い穴は晩期とのことです。そこからは、縁が摩耗した土器片と平らな石のかけらが出ていて、粘土をこそげ取った道具と考えられています。こういう調査事例を覚えておくと、自分が発掘をしたときに気付くので、いろいろな遺跡の現地説明会を見て歩くのはいいと思いますね。

次に(スライド28)、これは保存状態を示す粘土の塊になります。下段の真ん中は新発田市村尻遺跡です。たまたま焼けてしまったと思うのですが、よく観察すると葉っぱの跡があって、さらに、紐をこう回してその葉を留めたような跡が残っています。裏

返すと指で粘土をつまみ取った跡も残っています。昔、千葉市の加曽利貝塚博物館が土器の焼成実験をしていたのですが、そのときに「粘土は練ってから、ねかせておくと粘りが出ていい」と聞かされたものですから、これも、ねかせ状態かなと私が報告したものです(田中1991)。右は小千谷市の城之腰遺跡から出土した粘土塊です。これも同じように木の葉で包んだ跡があります。1.33kgです。村尻が1.6kgでした。それから右上、胎内市中条の江添遺跡という縄文時代後・晩期ですが、これは生粘土みたいで、焼けていないのが出ています。重さは不明です。そして上段左は、会津坂下町の鬼渡りA遺跡で、深鉢の中に白い粘土が保管されていた状態のようです。

さて、村尻・城之腰遺跡の粘土塊について、全然疑わずに「ねかせ」と書いたのですが、そうしたら、東京都の可見通宏さんが書かれた『縄文土器の技法』の中で否定されました。私は先輩を通して可見さんの業績を教えてもらい、非常に尊敬しているのですが、この本の中で「ねかせなんかあるわけない」と言われています。多摩NT-No.248遺跡は良質の粘土なので、いい粘土だったら別にねかす必要はないんだと。ですから私はこのスライド28では、「ねかせ」ではなく、「保存状態の粘土塊」と書いておきました。でも、ねかせがあるかないかは分からないので、もしかしたらあるかもしれないし、ないかもしれない。良質な粘土だから「ねかす」必要がないとは、逆を言えば、良質じゃない粘土の場合どうなるのかという話になるので。ちょっと結論は出ませんけれども。

なお、この本の中で可見さんは、下段左端の写真のような、こういう小さい、ちょっと握ったような跡がある粘土ですが、こういうものは、新しく採ってきた粘土を試し焼きしたんじゃないかと指摘されています。この『縄文土器の技法』という本は、縄文土器の作り方を学ぼうえで、読み易くていい本です。

#### 4 縄文中期の土器

(スライド29) さて、中期です。土器は中期の初めぐらいの平遺跡からの出土です。そして、分布図はひとつ新しい時期で、火焰土器の頃の土器型式の広がりになります。平遺跡の土器は、北陸に中心がある新崎式(にんざきしき)という土器型式が主体になります。特徴は、右の写真で文様を復元していますが、細い竹を半分に分けて、その内面で粘土を引



くんですね。そうすると断面がかまぼこ状の膨らんだ隆線を付けることができます。それをトントンと小刻みに押し引きしながら動かすと、連続の爪形文になります。前期のところ、同じような文様に結節浮線文という名前が付いていましたけれど、結節浮線文は細い粘土を貼り付けて、その上にこの方法で結節を付けます。連続爪形文は、同じ方法なのですが、粘土そのものに押し付け、かつ幅広です。ここで重要なのは、どうも新潟平野の人たちは、北陸から伝わってきた細竹を割った道具を非常に気に入らして、そのままずっと使い続けるのですね。

馬高式の火焰型土器には、縄文が使われていません。縄文を付けずに、この割った竹で縦方向の平行沈線をいっぱい引いて、その上から棒で沈線をなぞります。竹を使うと、模型写真にあるように、3本の平行線も簡単に引くことができるんですね。中期の中ぐらいになりますと、新潟平野は大木8a式という東北系の土器が主になります。会津の大木8a式とそっくりなのですが、何が違うかといったら、会津は棒で3本の沈線を引き、新潟では竹を使って3本線をきれいな平行線で引く。そのような違いで、新潟と会津の土器を区別できるんです。新潟で竹を使わない棒沈線の文様の土器が出てくれば、会津から持ち込まれた可能性があります。もちろん胎土も比較してですが。

他の文様の説明をします。左下の写真で、上段真ん中の口縁部は蓮華文という文様です。仏像の台座の蓮華に似ているからです。この左の縦横沈線は格子目文。これは割竹で縦の平行沈線を引いてから、横に細い沈線を入れて描きます。格子目文には斜め方向もあります。それから、左下2個が撚糸文です。撚糸文というのは、棒に撚り紐を巻いて転がした文様です。木目状撚糸文は板目ですね。昔の小学校の木造校舎の床は、こういう木目の板だったのですが。こういう文様や、割竹をいっぱい使う文様は、北陸の特徴になります。それに対して左上の写真は、縄を転がさずにそのまま押しつけた文様です。このような特徴の文様は、東北地方北部からの影響と考えられています。

#### 縄文土器の文様

(スライド30)「縄文」とはどういう意味かと言いますと、縄目の文様ということです。これはエドワード・シルバスター・モースという東京帝国大学に呼ばれたアメリカ人の貝が専門の生物学者が、横浜から新橋まで陸蒸気に乗らして、そのときに、この

大森貝塚を見つけるんですね。鉄道の横でカッティングされた崖に白い貝層があって。日本で初めての発掘調査を1877年に大森貝塚で実施します。その2年後の1879年に、英文、それから日本語で発掘報告書が刊行されます。その中でこの縄目の文様を、cord markという言い方をしています。これを後に東京帝大の白井光太郎が「縄紋」と訳したのです。糸へんが付いていますね。この縄目の文様は、編んだものを押しつけたんじゃないかと長らく言われていました。それを山内清男が、「これは編み物ではなく、撚り紐を転がした文様だ」ということを昭和6年、1931年に突き止めました。

基本はこれですね、縄目の文様になります。これが縄文です。それから棒に巻いて転がすと撚糸文。(スライド31)に代表的な縄文を示しました。左上が、縄文の一番基本的な文様である単節斜縄文です。撚紐を一回折って撚ると縄になり、その縄をもう一回折って撚ったものを回転させた文様が単節斜縄文です。「節」とはツブツブのことで、ひとつのツブだと単節、節が連なった列のことを「条」と呼びます。そして、文様を付ける道具のことは「原体」と言います。斜縄文は「斜めの縄文」と書きますが、原体を横に転がすと条が斜めに現れるためです。それから右上の写真は、結び目の回転。これはS字を連続したようなちょっと変わった文様です。この特徴的な文様は縄文晩期に多いのですが、特に加茂・田上あたりで非常に好まれていて、深鉢の口縁部にこれを何段にも付けています。山内清男は、それを戦前から指摘しているんですね。新潟県のそこら辺には、こういう文様をよく使っているんだと、ちゃんと書いている。

それから、中期初めのところに出てきた木目状撚糸文ですね。撚糸文というのは、撚紐を棒に巻き付けた原体を転がして付けた文様です。巻きつけ方によって、右側の網目状撚糸文など、いろいろな文様を作れます。右下は、縄の側面圧痕と言って、縄を転がさずに押しつけた文様です。1本の撚紐から非常に多くの文様を作ることができるのです。

なお、土器が初めて作られた縄文草創期の前半の土器には縄文を全然使っていません。中期の火焰土器や関東の土器にも縄文を使わない土器が多くありますが、縄文時代の土器なので縄文土器です。

#### 王冠型土器と折衷土器

さて、ここから皆さんお待ちかねの火焰型土器の話をしていきます。国宝になった火焰型土器ですが、長

岡から十日町・津南にかけて多く出ていますね。(スライド32)です。

基本の形は右下の2個です。これらが馬高遺跡から出ていて、『馬高式とその文化』という長岡市馬高縄文館のパンフレットからちょっと複製した写真です。火焰型土器と王冠型土器という形の違いがあり、合わせて火炎土器と呼びます。型式としては、縄文だけの素紋土器なども含み、馬高式です。

火焰型は、ニワトリのトサカ(鶏冠)のような大きい突起が付き、口縁には細かなギザギザがあります。王冠型は、大きく盛り上がった4個の突起が特徴です。しかし、両方とも下部は同じ文様で一緒、だから下のかげらが出たらどっちかわからない。口縁のギザギザが出れば火焰型土器、こういう突起が出れば王冠という、そんな区別です。

新潟市で出ているのは、この一番左の土器です。王冠型に似ている土器です。類似土器。下半には縄文が付いています。本場の馬高遺跡みたいに、竹管で縦にずら一と線を入れてないんですね。これはどういう土器かという、上半分は王冠型をもってきて、下半分は隣にあります大木8a式という全面縄文の東北の土器ですね。これら両方の情報を合体させてつくった土器。プロポーションも似てますよね。右上に火焰型土器のX線写真があります。火焰型土器のごてごてした粘土の貼り付けをする前の形で、よく見れば、この大木8a式と同じ形をしています。火焰土器の母体は大木8a式なのです。そして、そこに北陸から伝わっていた、半分に割った竹管で文様を付けるという技法、それが合体して生まれたのが火炎土器ですね。土器は、このように合体して、折衷というのですが、いろんなものを取り込んで、それがまた次の新しい型式へと変わっていくのです。

火炎土器の本場の信濃川中・上流域に行くと、火焰型土器がいっぱい出ている印象があります。阿賀野市・新発田市あたりでは王冠型ばかりで、火焰型土器はごく少ないのです。それがまた村上に行くと、火焰型土器が多いんですね。思うには、阿賀野市・新発田あたりは、会津から阿賀野川を通して入ってくる大木8a式土器の影響が強くて、なかなかこの火焰型を受け入れられないようなイメージが持たれます。それに対して村上まで行っちゃうと、そんなに大木式の影響はあまり受けなくて、海岸沿いを行き来して火焰型もいっぱい受け入れているのかなと、そんな感じがありますね。

ここにメモみたいに書いてありますが、「火炎1割、大木8式ほか3割、素紋6割」と。正確には、7%、30%、63%ですが。これは馬高遺跡のⅧE区1号住居の口縁部430点を集計した割合なんだそうです。火炎土器はその中のわずか1割で、大木8a式などや在지가3割、そして素紋と書いてありますが、縄だけ転がしたような土器、実用的な土器が半分以上を占めているという。そのような割合で遺跡から出ていますね。ですから、イメージ的には火焰の世界だと火焰ばかり出てくると思いがちですが、そんなことはなくて割合はすごく少ない。

言われているのは、火焰土器というとゴテゴテした実用的とは思えないような形から、マツリの道具説。また、内面にコゲが付いて煮炊きしているんだから、これは日常使う土器だと。別な見方をすれば、特別なマツリのときの煮炊きで付いたコゲかもしれないのです。その結論は、想像の世界になってしまうみたいですね。

#### 新潟市内の円筒上層式土器

(スライド33)、これは円筒上層式という土器です。青森・秋田・岩手の一部、北海道南部、ここら辺を分布圏とします。普通、何々式という型式名には遺跡の名前を付ける場合が多いのですが、この円筒上層式というのは、体部がバケツみたいでもっと長い形、円筒みたいな形だということで、名付けられた型式名です。円筒下層式は前期です。円筒上層式は新潟市内で3点が採集されています。新津丘陵の秋葉遺跡は一番右、左側ふたつは角田山麓にある大沢遺跡の採集です。非常に特徴的な文様なので、円筒上層とすぐに分かります。新潟県ではほかに、村上市の樋渡遺跡、糸魚川市の六反田南遺跡で出土しています。分布圏は北方ですが、そこから飛び火的に海岸沿いを来ているんですね。

秋葉遺跡の土器の胎土に、新津丘陵にしか出ない高温石英の砂が混和材として入っています。このことは、円筒上層式の形や文様の情報を持っている人が来て、新津丘陵のどこかで作った土器と考えることができるんですね。ですから、土器の胎土や混和材を観察することは、土器やその情報の動きを知ることができることにつながると言えるのです。例えば女の人が嫁いできたときに、そのような情報を持って来たとかも考えられます。ちょっと変わった土器なので紹介してみました。

## 深鉢の使用痕

(スライド34)で、深鉢を使った痕跡、使用痕の話をしていきます。何度か言っていますが、深鉢はほとんどが鍋として使われているのです。そのために深鍋と言う方もいます。使われた痕跡とは何かというと、ススやコゲといった炭化物です。ススは大体外側、コゲは内側ですね。左側の土器は、煮こぼれが炭化しています。そして、もうひとつの使用痕が赤化で、右側の土器の下半分がオレンジ色になっていますよね。これは火を受け続けたために変色し、もろくなっているのです。外面のススも、強い火を受けると燃えてしまいます。こういうところから、この土器は鍋に使われた、何かを煮たことがわかるのですね。

最初の年代説明のところ、炭化物を分析すると何年前かわかるという、C14年代測定の話をしてきましたが、もうひとつ、この炭化物の炭素・窒素同位体比分析という方法があるのです。難しいですが、この分析では、その炭の由来、どんなものの炭か分かるのだと。分析表を見ますと、左上は、C3堅果類、トチとかドングリとかですね。ジャガイモ、クリも入っています。いわゆる秋の味覚でしょう。下のほうは、C3植物&動物、サトイモ、エゴマ、ノビル、アズキ、そこにシカ、クマ、タヌキときますが、これはそのような植物を食べた動物が、同じような値になるということですね。それから海産物が右下にいます、サケとかですね。それからC4はトウモロコシとかアワなど。

このように、考古学は土器・石器だけを対象としているのではなく、いろんな学問・分野の研究方法を駆使して、学際的研究と言うのですが、各時代・地域の生活の復元を目指しているのです。

さてもうひとつは、(スライド34)の右中ほどにちょっと書いてありますが「完全な形の深鉢の廃棄」についてです。発掘しますと、深鉢は大量に出てくるんです、いっぱい。それも完全な形の状態なのに、捨てられているのが多い。何でだろうと、みんな疑問に思っていたのですが、明治大学の阿部芳郎さんが、2002年に『縄文のくらしを掘る』という本の中で書いているのは、一見完全な形なんだけれども、土器の下部が炎を受けてオレンジ色に劣化している。この部分の断面を実体顕微鏡で見たところ、中は細かなヒビだらけで、使ったら壊れるほどボロボロだということですね。ですから、昔の人は、「これは駄目だ、使えないや」と思って捨てちゃうんですね。見た目は完全な形なんだけれども。もう使用に耐え

ない土器、それがどうも捨てられているのだということ、その断面を顕微鏡で見たことによって、証明しているのです。ちょっと目からウロコでした。

## 5 縄文後期の土器

ここから縄文後期の土器、(スライド35)です。後期の初め、これは三十稲場式と言われる土器になります。新潟県と会津地方が分布圏です。深鉢の口縁部が外に開いて蓋受けという、蓋が載る形になっていて、全面の刺突文が特徴です。左上の写真が蓋形土器です。

この三十稲場式ですが、右下写真の左側が西蒲区の上原遺跡、右側が五泉市馬下稲場遺跡で「まおろしいなば」と読みます。同じ型式でも新旧があり、(スライド9)のように特徴を比較すると変化の様子がつかめます。古い方は上原遺跡で、例えば、口縁部の橋状把手、この橋がまたぐような取手ですね。この橋がなくなって、単なる貼付文に変わります。そして体部全面の刺突文は、上半だけにしか文様がなくなるのです。その文様も、区画を作ってその中に押し引きで線状の文様を入れる、そう変わります。全体的に何かしら変化していくのですが、かけらが出ても、こっちは新しいとかこっちは古いとかいうことがわかるんです。破片でも区別できる変化であれば、時間差を認識しやすくなります。

右上に土器型式の分布範囲の地図を載せてあります。赤い輪が新潟県中心になっていますけれども、三十稲場と次の南三十稲場式は大体このぐらいの範囲です。新潟平野と会津、山形県置賜地方ですね。十日町・津南の魚沼地方は、信濃川で長野との関係が近いので、ひんご式という北関東から長野にかけての土器の影響を多く受けています。それから青で囲んだのは綱取式で、これは福島、宮城の南のほうです。北陸には気屋式があり、上越地方はこの気屋式とひんご式の分布圏に入ります。このようにして、同じ時期に様々な土器を持っている集団があります。

面白いのが、左下の土器を見てください。三十稲場式と綱取I式との折衷と書いてあります。平遺跡の口縁部破片です。口縁部無紋帯の下の、粘土を貼り付けた隆帯の上を刻むやり方は三十稲場式の特徴です。綱取I式の特徴は、口縁部無紋帯に三日月状に粘土を貼り付けて、その両端に盲穴というのですけれども、円形の窪んだ穴ですね、これを押す。これが綱取I式の特徴です。ですから、この綱取I式



と三十稲場式の特徴が同じ土器の中に使われているということは、二つの土器型式が同じ時期だと分かるのです。このように、ひとつの土器の中に違う型式の要素が同居しているときは、折衷土器と言います。

#### 土器底面の敷物圧痕

次は、土器づくりの話の続きです。土器を作るときに粘土は敷物の上に置く話をしましたが、その敷物について少し詳しく説明します。(スライド36)です。

まず、右上の写真は広葉樹や草の葉です。これらは先月、弥生館の辺りにあるものを急ぎ採ってきて押し葉にし、それをラミネートフィルムでパックしたものです。カラムシは聞いたことがありますか。茎から繊維を取って、小千谷縮だとか十日町紬の糸になるのですが、十日町のそば屋に行くと、このカラムシの若い葉を天ぷらにしています。上段左です。真ん中がホウの葉、右がササ、下段右がクズの葉、それから下段左がクサギです。クサギは先端が切れています。クシャクシャにもむと臭いのでクサギです。それからササは、北陸から東北の寒い地域で、多く使われているようです。

土器の底に、敷物の圧痕が付いています。左下は、もじり編みというスタレ状の編み方ですね。ゴザを編んだりするやり方です。右の3点は網代編みです。右下写真は、それぞれの復元で、もじり編みはカラムシ、網代はマタタビの茎を裂いて編みました。土器底面の圧痕はネガ状態なので分かりにくいです。油粘土で型を取ると、もともとの形が現れるので、どういうふうに編んだかが分かりやすいということです。

さて新潟県の場合、中期の初めぐらいはスタレ状が多く、中期の中ぐらいからは、木の葉やササが多い。中期終わり頃の新発田とか阿賀野市辺りですと、なぜか網代をわざわざ消すんですね。きれいに消されていると敷物があったかどうか分からないけれども、消し忘れがあって部分的に残っている網代を見たら、「あ、これ消しているな」と。そういった目で見ると、消しているのがいっぱい見つかるのです。それが後期の中ぐらいからは、網代が多くなって、逆にこの網代をわざわざ目立たせるようになります。このように、土器の敷物でも、それぞれの作る集団や時期によって、好みとか違いが出てくるんですね。(スライド14)の村尻遺跡、弥生時代中期の再葬墓の土器も、網代・葉・ササの圧痕が付いてい

ますし、弥生後期では織物の布を敷いている例があります。

## 6 縄文晩期の土器

晩期になります。縄文時代最後の時期、(スライド37)です。大沢谷内遺跡とそのすぐ北の大沢谷内北遺跡が、晩期の大きな遺跡です。この分布図の緑色で囲っている範囲、上野原式と鳥屋式ですが、赤線の亀ヶ岡式土器の分布圏と重なり、両方の土器が一緒に出ます。

上野原式というのは三条の遺跡で、北区の鳥屋遺跡が鳥屋式の標識遺跡です。

編年対比表の左のほう、新潟県の上から3番目、上野原式というのがあって、その下に鳥屋1式、2a・2b式とあります。右の東北地方を見ると、大洞C2、A1、A2式が対応します。これが、大沢谷内遺跡・大沢谷内北遺跡の時期になります。

一番下の写真、大洞C2式の浅鉢があって、隣に上野原式の浅鉢があります。ほぼ同じぐらいの時期になります。違いは、上野原式では、この眼鏡状隆帯というんですけれども、文様の上の方に粘土の帯を巡らして、そこをテンテンと窪ませて、連続した楕円みたいなものを付ける。これが上野原式の特徴ですね。あと三角の模様を擦り消していますけれども、こういう地元の上野原式土器が、東北の本場の亀ヶ岡式土器と一緒に出てきます。それから1番左は鳥屋2式で、これは甕と言われている形ですけれども、口縁部が幅広で、体部の上の方が膨らむ形ですね。こういう新しい形が出てきます。

#### 深鉢の形と使い分け

後期の中ぐらいを境にして、深鉢の形や作り方が大きく変わります。(スライド38)の写真を見ますと、後期初めのほうは割合に寸胴に近いような形になっていますが、右の晩期では底部が小さくて直線的に斜めに立ち上がり、口縁部が大きく開く形になります。こうすると体部下半に当たる火が広い範囲に当たりやすくなる。熱効率が上がるんです。なおかつ非常に薄く作ることができるようになっています。そして、右上の粹線の中ですね、精製土器と粗製土器ってありますけれども、この精製・粗製の区別は、薄く作ってきれいな文様つける浅鉢や台付き鉢、香炉形土器・注口土器などの食卓にあがったり、特別な用途の土器が精製土器になります。それに対して粗製土器は、粗製といっても雑に作っているわけではなくて、ちょっと文様の付け方があまりきれ

いじゃないくらいの、煮炊きに使うナベがほとんどです。この違い、これは後期の中ぐらいの加曽利B式と言われる頃から作り分けがはっきりします。

では、もっと古い時期はどうかと思ったら、下にありますが、意匠文系土器と素文系土器とに分けられています。これは阿部芳郎さんが『駿台史学』で書いています〔阿部1998〕が、文様をいっぱい付けている土器と、縄文だけの土器との違いですね。ですから、薄く丁寧に作るとかの違いではないのです。文様の違いだけです。でも、その違いも当時は意味があったのでしょうか。さて意匠文は分かるのですが、この素文を辞書で引くと、素文（そぶん）と出るんです。ソブンというのは漢文で、返り点やレ点とかの付かない文に対して言うのだそうです。ですからこれだと素文（そぶん）系土器になってしまいますから、私はむしろ、紋、糸へんの紋を付けて、素紋（すもん）系土器、こっちがいいなど。後期よりも古い土器については、意匠文系土器に相当する有紋土器という言い方も使われています。

それから、深鉢内面に付着した炭化物の窒素と炭素の同位対比分析については、(スライド34)で食材の同定ができると言いました。ここでは、窒素と炭素の同位対比と深鉢の大きさを比較し、煮る対象によって土器の大きさを使い分けしているという考察がされています〔阿部ほか2021〕。この中では、炭素と窒素が多いと動物で、炭素が多くて窒素が少ないと植物質ということが書かれています。そして、大型の粗製深鉢は、ドングリなどのアク抜きに使ったんじゃないか。中型の深鉢は、混じった数値が出てくるので、日常の煮炊きなど多用途に使ったんじゃないか、と分析結果を解釈しています。また、東日本では、晩期は粗製土器が非常に多いということも言っています。

#### 土器実測図のしくみと描き方

時間となりましたが、今回の展示で私が一番やりたかったのが、(スライド39)にある土器はどのように実測するかという模型セットです。複製した土器を縦方向4分の1に切って、土器のどの部分が実測図ではどこに描かれるのかを示しました。本物の土器は右奥に置いてあります。当たり前のことですが、一般の方は実測図の約束事が分からないため、その見方の紹介も兼ねています。図面の左側には、外面の文様が描かれ、右側には内面の調整が描かれています。そして黒く塗った部分は断面です。詳しくは展示解説パンフレットに記載してあります。どのよ

うに計測し方眼紙に書き込んでいるのかを、ぜひ展示会場でご覧になってください。

以上、これで私の発表を終わります。一応やさしく説明するつもりではいたのですが、結果は皆さんの評価にお任せいたします。どうもありがとうございました。

#### 参考文献一覧

- 阿部芳郎1998「縄文土器の器種構造と地域性」『駿台史学』102
- 阿部芳郎2002『縄文のくらしを掘る』岩波ジュニア新書
- 阿部芳郎・栗島義明ほか2021「縄文土器の作り分けと使い分け」『日本考古学』第53号 日本考古学協会
- 可見通宏2005『縄文土器の技法』同成社
- 石川日出志2001「土器の実測とは何か」『考古学において遺物の実測とは何か』考古学技術研究会
- 小林謙一2017『縄文時代の実年代』
- 佐原 眞1987「考古学をやさしくしよう」『京都府埋蔵文化財論集』第1集 京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 佐原 眞1974「一括遺物・遺物変遷の順を追う」『古代史発掘5』講談社
- 佐原 眞1994『遺跡が語る日本人のくらし』岩波ジュニア新書
- 田中耕作1992「奈文研専門研修「縄文時代遺跡調査課程」に参加して」『新潟考古学談話会会報』第10号 新潟考古学談話会
- 田中耕作2004「考古学の用語と文章ことば」『新潟考古学談話会会報』第28号
- 松永篤知2008「網代・敷物」『総覧縄文土器』アムロプロモーション
- 山内清男1930「所謂亀ヶ岡式土器の分布と縄紋式土器の終末」『考古学』第1巻第3号



スライド1

## 考古学をやさしくしよう

佐原 眞 昭和7(1932)年~平成14(2002)年  
(奈良国立文化財研究所・国立歴史民俗博物館)

- 考古学をやさしくしよう ・考古学を楽しくしよう
- 学問の成果をいかにやさしく一般市民に還元するか  
(学術用語・略語・記号 ⇒ 研究の場で)

- 日常用語におきかえる
- 聞いて分かる用語を使う
- 解説を加える
- ただし、学術用語を完全に排除した説明や解説は不可能

今回の展示……学術用語の言い換え、日常語。対象は中学生以上  
展示解説パネル……一般の方と専門の双方に配慮。ただ字が小さい  
本日の講演……深く知りたい一般の方、若手の研究者向け

スライド2

## 難解な考古学の専門用語

- 遺跡……集落・生産(窯・製鉄)・埋葬・祭祀・洞窟・(性格) 低湿地・水中・都市・軍事
- 遺構……竪穴住居・掘立柱建物・炉・土坑(貯蔵・墓・掘る・盛る 落し穴)・埋設土器・貝塚・古墳・堀・溝・環状列石・盛土遺構・環濠・土塁・井戸・窯
- 遺物……道具と、人骨・食糧残さ(骨・貝・種実)  
材質⇒ 土器・石器・骨角器・木器・金属器  
用途⇒ 鉢・甕・鍋・注口土器・斧・弓・石鏃・石錐・釣針・土偶・装身具・銭・丸木舟
- 学術用語……型式・様式・類型・編年・層位・系列・遺棄

スライド3

## 今日の話のながれ

- 1 縄文時代とは
  - 土器は時代のモノサシ ・土器型式と編年 ・土器の新旧と同時
- 2 新津丘陵の縄文遺跡
  - 土器の分布圏 ・土器の形と部分の呼び方
- 3 縄文前期
  - 土器づくり
- 4 縄文中期
  - 縄文土器の文様 ・王冠型土器と折衷土器 ・深鉢の使用痕
- 5 縄文後期
  - 土器底面の敷物圧痕
- 6 縄文晩期
  - 深鉢の形と使い分け ・土器実測図の仕組み

スライド4

## 縄文時代とは

- 土器の生成……約16500~15500年前
- 縄文時代……約13000年間続く  
狩猟・採集(ドングリが主食)・漁労
- 時期区分……草創期・早期・前期・中期・後期・晩期  
細分(初葉・前葉・中葉・後葉・末葉)⇒言い換え
- 草創期……最終氷河期、旧石器的な道具箱、遊動生活
- 定住生活……早期になると温暖化、縄文文化の諸様相  
大集落、貝塚、ドングリ貯蔵、墓域、多器種土器  
弓矢や多様な石器、大型の石皿、マツリの道具

スライド5

## 土器は時代のモノサシ

縄文土器が初めて作られたのは約15500年前(16500年説もある)  
現在(西暦2020年)まで約13000年 縄文時代が84%

AMS放射性炭素年代測定法  
C14が5730±40年で半減  
1950年から何年前を示す yrBP  
較正年代の表記 CalBP

スライド6

## 土器型式と編年

- 土器型式  
形や文様などが共通する土器のまとめ  
一定の広がりや一定の時間幅(地方差・年代差)  
「このような形や文様、整形方法で作らなければならない。」  
という地域での約束事
- 土器編年  
土器を新旧で順序よく並べたモノサシ(相対年代)  
放射性炭素年代測定(C14年代)の併用⇒○○年前の土器  
一緒に出た石器や住居跡の時期を知る  
土器は大量に作られ、生活に密着

スライド7

## 縄文土器の形と部分の呼び方

- 陶磁器の呼び方から  
口縁部・体部(胴部)・底部
- 口縁部  
直立・内傾・内湾・外傾・外反  
口唇⇒口端の変容(山内1930)
- 縄文土器の基本形

参照 藤 1976 『縄文土器のはなし』 学芸社


スライド8




## 土器の見方 (要素に分解して比較)

表徴:  
その型式を特徴づける鍵の要素

菅生田	特徴	権現山
○	頭部のくびれた形	×
○	口頸部無紋帯	×
○	頭部のキザミ隆帯	×
○	4単位の筒状把手	×
×	体部の全面刻変文	○
三十稲場式である	判断	三十稲場式とは言えない



上ノ原遺跡(西蒲区) 三十稲場式 標準



権現山遺跡(愛知県)

菅生田遺跡(宮城県)

スライド9

## 土器の新旧と同時


- 層位学的方法**  
 地層累重の法則・・・水平堆積は下層が古く、上層が新しい(地質学)  
 地層同定の法則・・・遠く離れても同じ層(火山灰)
- 型式学的方法**  
 土器の変化をつかむ  
 本来のものがだんだん崩れてくる。役割を失う。発展していく(?)  
 折衷土器・・・別々の型式の文様が、ひとつの土器に使われる。同時期
- 一括遺物**  
 一括遺物: 同時に埋めた(埋まった)ひとまとまりの遺物。共伴出土  
 共伴出土は「出土の同時」であり、「製作の同時」ではない  
 共存の同時性: たまたま→暗示→蓋然性→確実性(佐原は5回共存で)  
 土器の出土状態 ⇒ 遺構内共伴と遺構の切り合い 同時か、新旧か

スライド10

## (1) 層位学的方法

・層位の基本 ⇒ 水平堆積の層は、上層が新しく、下層が古い。  
 ・見えない(認識できない)土層の乱れ、ピット(小穴)

「土層は生では使わない」・・・混入を前提(山内清男)  
 (田中耕作1992『新潟考古学談話会報』10号)



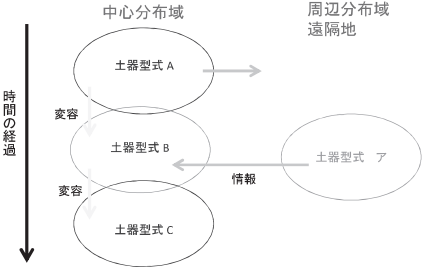
阿賀町 室谷洞窟(小熊博士2007)



東北大学1995『中沢目貝塚Ⅱ』宮城県

スライド11

## (2) 土器型式(時間と空間)



中心分布域 周辺分布域 遠隔地

土器型式 A 土器型式 B 土器型式 C 土器型式 ア

時間の経過 ↓

変容 変容 情報

スライド12

## 火炎土器の成立と周辺地域の土器

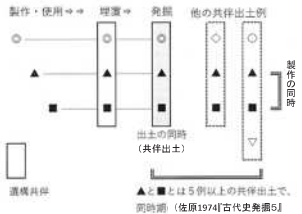


長岡市教委2010「火焔土器と馬高・三十稲場遺跡」

スライド13

## (3) 一括遺物の考え方

製作の同時と、出土の同時(共伴出土)  
 一括遺物 ⇒ 同時に埋めたもの・残されたもの




製作・使用 ⇒ 埋置 ⇒ 発掘 他共伴出土例

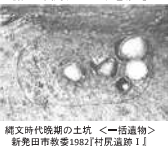
製作の同時 出土の同時 (共伴出土)

遺構共伴

▲と■とは5例以上の共伴出土で、同時期 (佐原1974『古代史集』6)



弥生時代の墓坑 <一括遺物>  
 新発田市教委1982『村原遺跡Ⅰ』

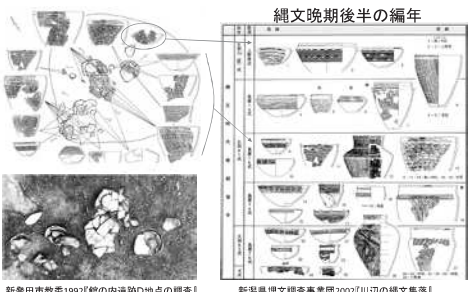


縄文時代晩期の土坑 <一括遺物>  
 新発田市教委1982『村原遺跡Ⅰ』

スライド14

## 土坑の共伴出土(古い土器も一緒に埋置)

縄文晩期後半の編年



新発田市教委1992『総の内遺跡D地点の調査』

新潟県縄文調査事業団2002『川辺の縄文集落』

スライド15

## 竪穴住居の土器破片出土

住居の窪みを埋めた土に含まれていたと解釈  
 ⇒ 一括遺物ではない



平遺跡1号住居(後期初め頃) 新津市教委1983

スライド16

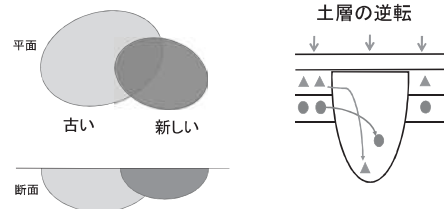
### 住居の炉の共伴出土例(入れ子の土器)



縄文中期終わり頃の竪穴住居(西方前遺跡)  
 炉の埋設土器が入れ子(上下を切断した土器)  
 ⇒住居が使われていた時期を示す  
 (福島県三春町教委1992『西方前遺跡Ⅲ』)

スライド17

### 遺構の新旧関係



遺構の切り合い  
 後から掘った穴が、埋まっていた  
 古い穴を壊している

・埋蔵・埋納(目的・意識)  
 廃棄・土に混在(偶然・無意識)  
 置き忘れ・災害(遺棄)

スライド18

### 新津丘陵の縄文遺跡

- ・新津丘陵の北部  
 標高95~110mの里山
- ・東に阿賀野川 西に信濃川
- ・丘陵上の遺跡(標高15~22m)  
 丘陵先端の平坦地  
 平地との高低差10~15m  
 縄文前~晩期
- ・平地の遺跡  
 縄文晩期(大沢谷内遺跡)



スライド19

### 秋葉遺跡(縄文時代 中期初め~後期初め頃)

- ・丘陵先端の平坦面~緩い斜面
- ・標高 20~22m
- ・平地との比高差 15m
- ・調査:1998(平成10年)から13次
- ・住宅建築・駐車場造成など小規模
- ・竪穴住居・石圍炉(後期)  
 掘立柱建物・土坑



スライド20

### 平遺跡(縄文時代 中期初め頃~後期前半)

- ・新津丘陵東側緩斜面
- ・標高 15~21m
- ・平地との比高差 10m
- ・調査:1981(昭和56年)  
 2020(令和2年)
- ・竪穴住居(中期初め~後期初め頃)  
 石鍾・土鍾(おもり)多い



スライド21

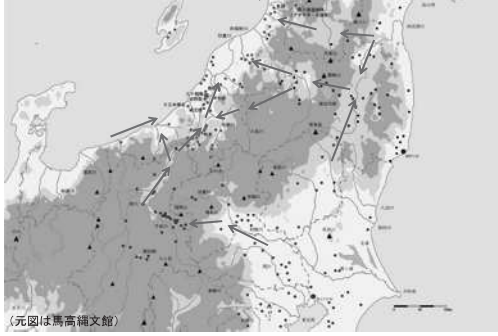
### 大沢谷内遺跡(縄文時代 晩期後半)

- ・新津丘陵から西へ約1km
- ・地表の標高 4m
- ・調査面は地表から1m下
- ・調査:2005(平成17年)から  
 2016(平成28年) 25次
- ・天然アスファルトの精製
- ・一時滞在のムラ(生活に必要な石器の種類や量が少ない、  
 粗製深鉢が大多数で他の器種少、マツリの道具なし)
- ・物々交換の港? 周辺は湿地帯。現信濃川は西へ1.5km



スライド22

### 新潟平野に入る道



スライド23

### 土器の分布圏

- ・中心分布域と周辺分布域(土器分布圏)
- ・遠隔地(飛び火的出土)
- ・交通路(交易・交換)⇒大きな河川  
 信濃川・阿賀野川・荒川・日本海
- ・搬入土器の認識 ⇒土器の移動・情報の移入
- ・地域間のつながり・交流(人・情報)
- ・ヒスイ・黒曜石・アスファルト・干し貝(交易品)

スライド24

### 縄文前期の遺跡

縄文前期の遺跡分布

居村E遺跡(前期初の縄・布目式)

新発田市ニタ子沢A遺跡(前期終わり頃 真砂式)

草水2丁目窯跡(前期終わり頃)

真砂式

大木6式

朝日下層式

スライド25

### 縄文土器の作り方

- ① 素地作り・混和材を混ぜて練る。
- ② 形作り・粘土ヒモを積んで形を作る。内外面を整える。
- ③ 文様づけ・立体的な装飾は太い粘土ヒモ。
- ④ 仕上げ・生乾きの時に、ツルツルの石や貝殻で磨く。
- ⑤ 焼成・日陰で乾かし、500~700度くらいで野焼き。

<参考文献>  
可児通宏2005『縄文土器の技法』同成社

多摩NT-No245遺跡 51号住居内の土器づくり  
(東京江戸東京博物館2021『東京に生きた縄文人』)

スライド26

### 粘土採掘坑

竈原遺跡(後期中頃と晩期中頃)  
三十稲場遺跡(後期初め頃)  
多摩NT-No248遺跡(中期中頃)

竈原遺跡 粘土採掘坑(会津坂下町教委2021)

三十稲場遺跡 粘土採掘坑(長岡市教委 2010)

多摩NT-No248遺跡 粘土採掘坑(東京江戸東京博物館2021『東京に生きた縄文人』)

スライド27

### 保存状態の粘土塊

- ・生粘土・焼粘土
- ・混和材の有無
- ・出土位置

・陶芸の「ねかせ」はあるのか?

・粘土の試し焼き?  
↓(by 可児2005)

金津坂下町鬼渡りA遺跡(土器内保存)

江添遺跡(生・不明) 24.2×20.2×10.7cm

村尻遺跡(焼・混)

村尻遺跡(焼・混) 1.61kg 14.0×13.3×9.8cm

城之腰遺跡(半生焼・無) 1.33kg 15.0×14.0×6.3cm

スライド28

### 縄文中期の遺跡

縄文中期の遺跡分布

東北系

北陸系

中山前・天押山式 土器分布

真高式土器分布

竹管文と連続爪形文

スライド29

### 縄文土器の文様

「縄文」という名称  
E.S.モース「大森貝塚の発掘調査報告書(英文)」1879年  
cord mark (縄目の文様)⇒白井光太郎が「縄紋」と訳す

山内清男が撚紐(ヨリヒモ)の回転圧痕と突き止める 1931年

縄目以外の文様(貝殻 押型文 棒状工具など)

縄文 木目状撚糸文 竹管文 連続爪形文 条線文 網目状撚糸文

スライド30

### 「縄文」= 撚紐(ヨリヒモ)の回転文様

<基本> 単節斜縄文 2回撚る  
右撚り・左撚り  
撚がす⇒45° 傾く

単節斜縄文 RL

結節(結び目の回転)

木目状撚糸文

網目状撚糸文

羽状撚文

縄の側面圧痕

撚糸文 (軸に撚紐を巻く)

佐原 真1981「特論 縄文施文法入門」『縄文土器大成3』

スライド31

### 王冠型土器と折衷土器

馬高式 ←火炎土器 ←火焰型土器 (素紋)土器 王冠型土器

大木8a式を母体  
キャリパー状の器形・鶏頭冠突起  
横S字状文・剣先状文

構成⇒火炎1割・大木8式ほか3割・素紋6割

火焰土器のX線CT (新潟県立歴史博物館2004『火炎土器の研究』)

王冠型類似土器 (秋葉遺跡)

大木8a式土器 (新発田市上草野E遺跡)

火焰型土器 素文 (馬高遺跡)

王冠型土器 素文

船形リーフレット「馬高式土器とその文化」長岡市馬高縄文館2019

スライド32



## 新潟市内の円筒上層式土器

秋葉遺跡(秋葉区)円筒上層d式  
大沢遺跡(西蒲区)円筒上層b・c式

樋渡遺跡(村上市)円筒上層b式  
六反田南遺跡(糸魚川市)円筒上層d式



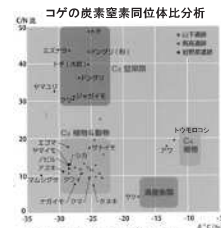
円筒上層b式 円筒上層c式 円筒上層d式  
(大沢遺跡) (秋葉遺跡)



スライド33

## 深鉢を使った痕跡(使用痕)

炭化物(ス・コゲ)と橙色化(赤化) ⇒ 煮炊き(ナベ)



完全な形の深鉢の廃棄  
⇒ 見えない劣化  
(阿部芳郎2002「縄文のくらしを語る」)



新発田市石田遺跡(中期終わり頃) 秋葉遺跡(中期後半)  
吹きこぼれの跡 下1/3が橙色化

スライド34

## 縄文後期の土器

・中期終わりから後期初め⇒ 寒冷化  
食料調達・居住環境の変化



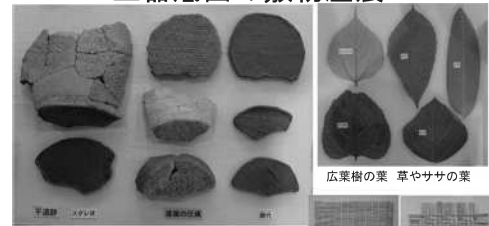
平遺跡 蓋形土器  
網取I式  
三十稲場式  
三十稲場式と網取I式の折衷(平遺跡)



西蒲区 上原遺跡 三十稲場式(古) 五泉市 馬下稲場遺跡 三十稲場式(新)

スライド35

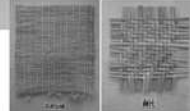
## 土器底面の敷物圧痕



後期前半の底面圧痕(平遺跡)

中期初め頃: スダレ状が多い  
中期中頃から: 木葉・ササが多い(多雪地帯)  
中期終わり頃の阿賀北: 敷物圧痕をナゲ消す  
後期から: 網代が多くなる

広葉樹の葉 草やササの葉



もりじり編み(カラムシ) 網代編み(マサヒ)

スライド36

## 縄文晩期の土器

土器型式の編年対比

期	新潟県	東北地方	長野県
前期	大沢1式		信野1式
前期	大沢2式		信野2式
前期	大沢3式		信野3式
前期	大沢4式		信野4式
前期	大沢5式		信野5式
前期	大沢6式		信野6式
前期	大沢7式		信野7式
前期	大沢8式		信野8式
前期	大沢9式		信野9式
前期	大沢10式		信野10式
前期	大沢11式		信野11式
前期	大沢12式		信野12式
前期	大沢13式		信野13式
前期	大沢14式		信野14式
前期	大沢15式		信野15式
前期	大沢16式		信野16式
前期	大沢17式		信野17式
前期	大沢18式		信野18式
前期	大沢19式		信野19式
前期	大沢20式		信野20式
前期	大沢21式		信野21式
前期	大沢22式		信野22式
前期	大沢23式		信野23式
前期	大沢24式		信野24式
前期	大沢25式		信野25式
前期	大沢26式		信野26式
前期	大沢27式		信野27式
前期	大沢28式		信野28式
前期	大沢29式		信野29式
前期	大沢30式		信野30式
前期	大沢31式		信野31式
前期	大沢32式		信野32式
前期	大沢33式		信野33式
前期	大沢34式		信野34式
前期	大沢35式		信野35式
前期	大沢36式		信野36式
前期	大沢37式		信野37式
前期	大沢38式		信野38式
前期	大沢39式		信野39式
前期	大沢40式		信野40式
前期	大沢41式		信野41式
前期	大沢42式		信野42式
前期	大沢43式		信野43式
前期	大沢44式		信野44式
前期	大沢45式		信野45式
前期	大沢46式		信野46式
前期	大沢47式		信野47式
前期	大沢48式		信野48式
前期	大沢49式		信野49式
前期	大沢50式		信野50式
前期	大沢51式		信野51式
前期	大沢52式		信野52式
前期	大沢53式		信野53式
前期	大沢54式		信野54式
前期	大沢55式		信野55式
前期	大沢56式		信野56式
前期	大沢57式		信野57式
前期	大沢58式		信野58式
前期	大沢59式		信野59式
前期	大沢60式		信野60式
前期	大沢61式		信野61式
前期	大沢62式		信野62式
前期	大沢63式		信野63式
前期	大沢64式		信野64式
前期	大沢65式		信野65式
前期	大沢66式		信野66式
前期	大沢67式		信野67式
前期	大沢68式		信野68式
前期	大沢69式		信野69式
前期	大沢70式		信野70式
前期	大沢71式		信野71式
前期	大沢72式		信野72式
前期	大沢73式		信野73式
前期	大沢74式		信野74式
前期	大沢75式		信野75式
前期	大沢76式		信野76式
前期	大沢77式		信野77式
前期	大沢78式		信野78式
前期	大沢79式		信野79式
前期	大沢80式		信野80式
前期	大沢81式		信野81式
前期	大沢82式		信野82式
前期	大沢83式		信野83式
前期	大沢84式		信野84式
前期	大沢85式		信野85式
前期	大沢86式		信野86式
前期	大沢87式		信野87式
前期	大沢88式		信野88式
前期	大沢89式		信野89式
前期	大沢90式		信野90式
前期	大沢91式		信野91式
前期	大沢92式		信野92式
前期	大沢93式		信野93式
前期	大沢94式		信野94式
前期	大沢95式		信野95式
前期	大沢96式		信野96式
前期	大沢97式		信野97式
前期	大沢98式		信野98式
前期	大沢99式		信野99式
前期	大沢100式		信野100式



大沢C2式(浅鉢) (大沢谷内遺跡 立ち点) 上野原式(浅鉢) 上野原式(広口鉢) (大沢谷内遺跡) 鳥籠2式(壺)

スライド37

## 深鉢の形と使い分け

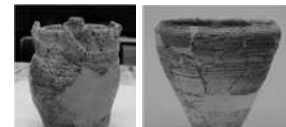
後期中頃 ⇒ 形や作り方が大きく変わる  
小さな底部・大きく開く体部・薄い壁  
炎の当たる面積が増え、熱効率上がる

精製土器と粗製土器  
(後期中頃: 加曾利B式から)  
意匠文系土器と素文系土器  
(後期初め: 堀之内I式以前)

炭化物の分析(炭素と窒素の同位体比)  
(阿部芳郎ほか2012「日本考古学」33)

炭素(多)、窒素(多) ⇒ 動物質  
炭素(多)、窒素(少) ⇒ 植物質  
炭素(少)、窒素(少) ⇒ 無機質  
大型の粗製深鉢 ⇒ アク抜き  
中型の深鉢 ⇒ 日常の煮炊き

東日本の晩期  
大型の粗製深鉢が7~8割



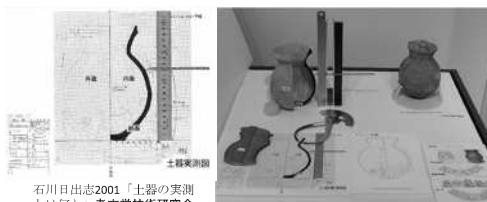
平遺跡(後期初め頃) 大沢谷内遺跡(後期中頃)

スライド38

## 土器実測図の仕組みと描き方

実測図の目的

- ・作った技術や使った状態などの情報を記録・保存
- ・実物を直接見られない人に伝えること



石川日出志2001「土器の実測とは何か」考古学技術研究会

スライド39

## 写真・図出典一覧

スライド1・20・21上・右下・22・32：新潟市教育委員会提供、一部加筆  
スライド8左上：新潟市教育委員会2020『大沢谷内遺跡Ⅵ 第15・17・19次調査』  
スライド8右上：田口昭二1983『美濃焼』ニュー・サイエンス社  
スライド8下：甲野勇1976『縄文土器のはなし』学生社  
スライド9右上：巻町1994『上原遺跡』『巻町史』資料編1 考古  
スライド9左下：宮城県教育委員会1982『東北自動車道遺跡発掘調査報告書Ⅶ 菅生田遺跡』  
スライド9右下：早野浩二2005『権現山遺跡出土の三十稲場式土器』『考古学フォーラム』18  
スライド11左：小熊博史2007『縄文文化の起源をさぐる：小瀬ヶ沢・室谷洞窟』新泉社  
スライド11右：東北大学文学部考古学研究会1995『縄文時代晩期の研究2：中沢日貝塚Ⅱ』  
スライド13：長岡市教育委員会2010『火焰土器と馬高・三十稲場遺跡』  
スライド14左：佐原眞1974『遺物の変遷の順を追う：形式学的方法の原理』『古代史発掘5』講談社  
スライド14右上・右下：新発田市教育委員会1982『村尻遺跡Ⅰ』  
スライド15左：新発田市教育委員会1992『館ノ内遺跡D地点の調査』  
スライド15右：新潟県埋蔵文化財調査事業団 新潟県教育委員会2002『川辺の縄文集落：シンポジウム「よみがえる青田遺跡」資料集』  
スライド16：新津市教育委員会1983『平遺跡緊急発掘調査報告書』  
スライド17：三春町教育委員会1992『三春町文化財調査報告書16：西方前遺跡Ⅲ』  
スライド21左下・25・29・30・33～39：筆者撮影  
スライド23：馬高縄文館のものに加筆  
スライド26・27下段中央・下段右：東京都埋蔵文化財センター・東京都江戸東京博物館（編）2021『東京に生きた縄文人』  
スライド27右上：会津坂下町教育委員会2021『竈原遺跡』『会津坂下町内遺跡発掘調査報告書Ⅶ』  
スライド27下段左・34左：長岡市教育委員会2010『火焰土器と馬高・三十稲場遺跡』  
スライド28上段中央：会津坂下町教育委員会1989『中丸遺跡 鬼渡りA遺跡』  
スライド28上段右：新潟県教育委員会・新潟県埋蔵文化財調査事業団2005『江添遺跡』『日本海沿岸東北自動車道関係発掘調査報告書Ⅸ』  
スライド28下段3点：田中耕作1991『村尻遺跡出土の「ねかせ」状態の焼粘土塊について』『北越考古学』第4号 北越考古学研究会  
スライド31：写真佐原眞1981『特論 縄文施文法入門』『縄文土器大成3』講談社  
スライド32右上：新潟県立歴史博物館2004『火炎土器の研究』同成社  
スライド32：新発田市教育委員会提供  
スライド32下段右2点：馬高縄文館2019『馬高式土器とその文化』展示解説リーフレット  
スライド39左：新潟市文化財センターのものに加筆